

「超自然」の再考：共同研究：驚異と怪異：想像界の比較研究

著者	山中 由里子
雑誌名	民博通信
巻	164
ページ	18-19
発行年	2019-03-29
URL	http://doi.org/10.15021/00009406

共同研究 ● 驚異と怪異——想像界の比較研究(2015—2018年度)

人類は、自然界の直観的理解から逸脱するが、その存在や現象を否定もできない不思議なものごとに対する解釈や対応をさまざまなかたちで行ってきた。それは既知の世界の彼方にある、理解不能で、想定外のものを知ろうとする—あるいは手なすけようとする—営みでもあった。本共同研究「驚異と怪異——想像界の比較研究」では、こうした行為の産物である「驚異」や「怪異」の表象を、おもにユーラシア大陸の東西の伝承・史料・民族資料・美術品に探り、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の動き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などの比較検討を進めてきた。

昨年度の研究会では、「自然」と「超自然」、もしくは「この世」と「あの世」の心理的・物理的距離感の文化的な差を検討した。今年度は最終年度であり、「驚異・怪異の物的証拠」という物質文化をテーマとする会と、「境界論」をテーマに自然思想や宗教観を大局的に捉える会を設け、成果論集につなげる総括的な討論を行った。

前者のテーマについては、小宮正安(横浜国立大学)が「驚異の部屋—ヴンダーカンマーの謎と蒐集品」、松田陽(東京大学)が「不思議なモノの収蔵地としての寺社」、宮下遼(大阪大学)が「民間信仰の商品化—トルコの邪視魔除け護符ナザル・ボンジュウ」、寺田鮎美(東京大学)が「異世界制作の方法—ミュージアムにおけるモノの収集・展示・認識」を発表した。そして後者のテーマについては、大沼由布(同志社大学)が「西洋中世の百科事典と自然の分類」、秋道智彌(山梨県立富士山世界遺産センター)が「自然と超自然の境界論」、山田仁史(東北大学大学院)が「驚異・怪異の人類史的基礎」を発表した。

どの発表も示唆に富むものばかりであったが、それぞれ要約するには紙面が足りないので、成果公開に向けての総合討論の中ででてきた問題点をいくつか紹介しよう。

分析概念としての驚異と怪異

当研究会では、*mirabilia*, *marvel*, *wonder*, *prodigy*, *'ajā 'ib*, 怪異・怪異、物の怪などといった、一次資料に登場する言葉の

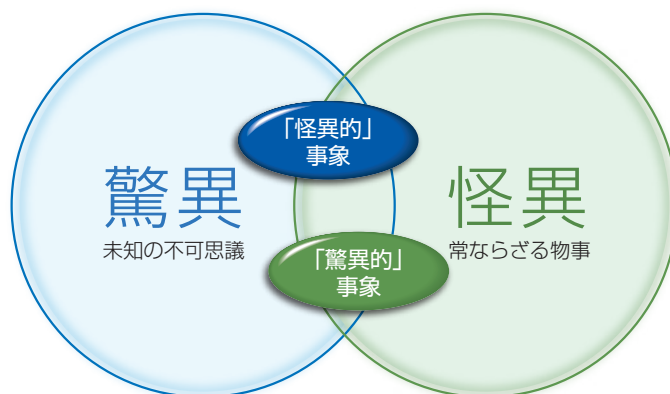
用法と文脈に注意を払い、安易に「イスラーム世界の妖怪」といった表現を使うことは避けるべきであると、開始当初から強調してきた。発表と議論を積み重ねてゆく中で、驚異文化圏であるヨーロッパや中東の文化事象にも日本語の「怪異」という言葉のほうがかっきりくる場合があり(たとえば、2017年11月3日の菅瀬晶子(国立民族学博物館)によるパレスチナの「ジン憑き」についての発表)、逆に怪異文化圏である東アジアの事例にも一神教世界における「驚異」の意味範囲に近いもの(たとえば2016年12月3日の木場貴俊(国際日本文化研究センター)による近世日本の本草学における生類としての怪類についての発表)もあるということが見えてきた。

香川雅信(兵庫県立歴史博物館)が2016年2月7日の研究会で述べたように、「驚異」と「怪異」はいずれも「記録すべき不思議なこと・稀なことという意味で対置されるべき概念」である。地域・時代による変遷はあるものの、驚異研究者と怪異研究者がそれぞれ対象としてきた範囲の「磁場」の中心をあえてざっくりと定義すると、「驚異」とは時間的・地理的に遠い未知の珍しい事象で、それに対して「怪異」は身近なところでも起こりうる、あるいは見慣れた日常がずれるからこそ異常性が際立つ、常ならざる現象といえよう。領域が重なる部分は「驚異的怪異」、あるいは「怪異的驚異」とでもいえようか。

驚異・怪異と「超自然」

人は、こうした直観的な自然理解を逸脱する不可思議な物事の出現のつじつまを合わせるために、何らかの見えない力の介入をみだしてきた。近代以前の一神教世界ではそれは「神」—キリスト教世界では近世以降は「悪魔」の存在感も強くなる—であり、東アジアでは「天」や「気」であった。最終討論の際に共通認識として顕著に現れてきたのは、それらの存在をおしなべて「超自然」という言葉でくくることへの違和感である。

「そうした〔不思議、神秘的、奇妙、薄気味悪い〕出来事・現象を『超自然的なもの』の介入によって生じたとみなすとき、それは『妖怪』となる」(小松2011: 10)といったように、「超自



「驚異」と「怪異」の意味範囲

然」は、妖怪研究においても、定義の根幹部分で使われてきた用語である。しかし、驚異や怪異をそれぞれの時代や文化圏における自然理解の中に位置づける考察を行ってきた結果、「超自然」が西洋近代的なnatureの概念にのっとったものであり、現代人が「自然科学的に存在しないと思っているもの」という否定的な色合いをつけてしまう言葉であるという認識に至った。

別の言い方をすれば、「自然界」に内包されるもの(超越的な存在と自然環境と人間の関係性)が、キリスト教世界とイスラーム世界と東アジアでは異なるため、「自然を超えた存在」という考え方は、イスラーム世界の驚異や東アジアの怪異には当てはまらないのである。

ヨーロッパのキリスト教世界の文脈では、奇跡・驚異・魔術が論じられる際に、「超自然」、「脱自然」、「反自然」といったように、「自然」という概念が介在してきた。一方、近世以前のイスラーム世界では、驚異も含めた万物全てが神の徴(しるし)で、驚異論においても奇跡論においても「自然」はあまり大きな役割を果たさない(山中2015に収録された池上、黒川、二宮の各論文を参照)。

東アジアの場合とさらに比較すると、前述の本場による近世日本の「怪異」と自然思想についての発表や、佐々木聡(金沢学院大学)が当研究会の議論を踏まえて執筆した漢代における災異説に関する論文(佐々木2018)によると、森羅万象は陰陽五行の気の運行によって統御されるという運氣論が自然理解の基盤にあるため、天変地異や怪しい獣といった怪は天地の気の異常作用によって生じるものとされる。稀ではあるが、けっして自然界を超越した現象や存在ではない。

このように、東アジアの怪異をヨーロッパや中東の驚異と対比させた結果、怪異は「自然vs.脱自然・超自然」という対置構造の中で理解されるべきでなく、むしろ「常vs.異」、もしくは「理vs.理外」(道理vs.道理を逸したもの)のせめぎあいとして捉えるべきであろうということが分かってきた。しかも「異」も「理外」も不思議で、不可知ではあっても、天地の動きの一部なのである。

2019年夏頃に刊行予定の成果論集では、メンバー各自が専門とする分野や時代における「自然」と「超自然」の概念を問いつつ直すような論考が期待される。

今後の展望

本研究の成果はまた、特別展示「驚異と怪異——想像界の生きものたち」(2019年8月29日～11月26日)としても広く一般公開する。本展覧会は、驚異・怪異文化圏の怪物や妖怪を、世界各地の想像上の生きものと並べて相対化することにより、自然界



大阪府北部地震から間もない研究会で防災ヘルメットをかぶる参加者。天変地異にもめげず、活発な議論が行われた(2018年7月1日、国立民族学博物館)。

と人間の想像力と表象の関係性を考えさせるものになるはずである。

さらに科学研究費補助金(基盤研究(A))「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」が本年度に採択され、5か年計画で、これまでの共同研究での成果を国際展開してゆく。共同研究では驚異・怪異の事例の比較はさまざまな切り口から行ったが、その背景にある環境・自然思想・信仰との関連性についての考察はまだ道半ばであると感じている。科研ではこの課題を深化させ、ヨーロッパ・中東・東アジアの間の文化的動態の潮流の中に自然界と想像界の相関関係の歴史的変遷を位置づけ、その基層にある心性メカニズムを、学際的・多元的視点から究明してゆきたい。

【参考文献】

小松和彦編 2011『妖怪学の基礎知識』東京：角川学芸出版。
佐々木聡 2018『異と常——漢魏六朝における祥瑞災異と博物学』東アジア怪異学会編『怪異学の地平』pp. 40-59, 京都：臨川書店。

山中由里子編 2015『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』名古屋：名古屋大学出版会。

やまなか ゆりこ

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は比較文学、比較文化。単著『アレクサンドロス変相——古代から中世イスラームへ』(名古屋大学出版会 2009年)が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。編著『<驚異>の文化史——中東とヨーロッパを中心に』(名古屋大学出版会 2015年)など。